

I 社会科における自律した学習者の姿

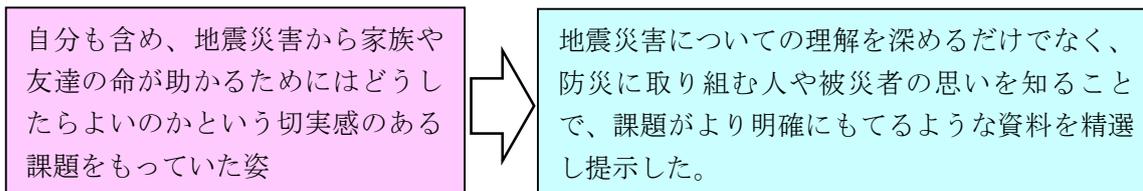
- 資料や社会的事象を基に課題をもち、解決への見通しをもつ姿
- 自らの学習状況を見つめ、調べ直したり考え直したりしながら社会的事象を追究している姿
- 根拠や理由を明確にしてまとめ、自分の意見や提案を説明している姿

II 授業デザインの取組

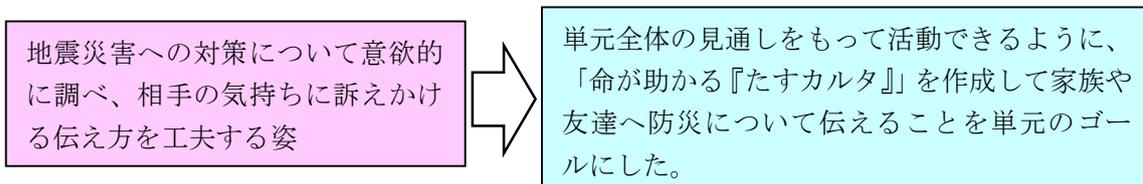
- 複数の資料や日常生活につながる事象等、価値ある問いを促す資料提示をする。
- 互いの考えのずれや曖昧さを情報交換によって焦点化し、全体で共有する場をもつ。
- まとめを基に、問題の解決や自らの生活への活用を意識した、自分なりの考えや提案を述べる場面をゴールとする単元構想を工夫する。

III 1年次に生成した仮説

1 成果



地震や津波の動画や写真は簡単に見ることはできる。地震の「怖さ」を知ること大切ではあるだろうが、「怖い」からこの地域には住みたくないと考える子どもがいた。逆に、秋田県は東日本大震災ではたまたま死者がなく、安心だと考える子どももいた。それぞれの地域にはそれぞれのよさがあり、家族が、友達が住んでいる。だから「助きたい」につながるのではないか。地震災害の映像や被害の現状、いかに地震が高頻度で起きているのかが分かる資料等を示しながらも、子どもたちの心に響くものを探した。東日本大震災での印象的な資料やエピソードが数多ある中から、子どもたちの心に響くものを精選し、理解につながっていた。涙を浮かべながら、そこにかかわる「人」に注目して、「人」の生活や命に対する思いを大切にしたいと考えていくことができていた。



「たすカルタ」で伝えるというゲーミフィケーションを取り入れることで、「こんなときはどうすればいいのか」というQ&A形式で作成することへの見通しをもつことができた。さらに、どんな場所で、どんなときに、どんな状況で地震が起こった場合なのか、地震が起きる前、地震が起きたとき、地震後の避難生活等のどのタイミングでのことなのかを意識してバランスよく調べて伝えようとする姿があった。これは、家族や友達の命が助かるために「防災情報の抜け落ちがあったら困るな」という気持ちの表れであろう。ゲーミフィケーションを取り入れたからといって、必ず子どもが意欲的になるわけではない。単元全体を通して自分が何のために追究するのかという目的意識をしっかりとつことが大切ではないかと考えた。

2 課題

明確な課題をもち、単元のゴールに向かって追究することはできた。ただ、それぞれが調べた内容や考え方を交換したり共有したりする場面の設定や活動の方法は適切であっただろうか。より必要感をもち、友達の考えを取り入れて学習をしていけるような場面設定が必要であろう。そのために、個別の課題を追究する学びと協働で情報交換や話し合いを進めていく学習活動の往還が効果的に行われる学習になるよう、学習全体を支える資料や学習方略の精選をし、子ども自身が問題解決のために自らの学習状況を見つめ、考えを深める姿を引き出すための授業構想を模索したい。

指導者：石田 智之

研究の実践

- 1 単元「命が助かる『たすカルタ』で伝えたい ～地震災害からくらしを守る～」
- 2 授業の実際

(1) 防災を自分ごととして捉えられるように

子どもたちは、社会的事象の点と点を結んで思考を深めたり、社会の現状と原因を追究していったりするような「社会科の醍醐味」を感じられず、社会科の学習に対する意欲も高まらないでいた。また、「地震災害からくらしを守る」の学習については、地震や防災への関心はあるものの、自分の身に振りかかってくるかもしれないという危機感はそのままでなかった。

そのため、単元づくりとして、「たすカルタ」作成を通して防災のアイデアを色々な人に伝えることを目的意識として楽しみながら学習ができたかと考えた。しかし、悲惨な現実もある地震災害について楽しみながら学習を進めてよいかという葛藤もあった。そのため、学習方法は楽しく「たすカルタ」を作成するのだが、子どもの内面に「助けたい」という思いが絶対に必要ではないかと考え、資料提示を入念に行った。今やYouTube等で地震や津波の動画は簡単に見ることはできる。地震の「怖さ」を知ること大切ではあるだろうが、参考文献「人が死なない防災（片田敏孝著）」によると、自然災害が起きるからといって自分が住んでいる地域を嫌いになってはいけない、今の地域から離れたと思うだけではいけない、ともあった。地域にはよさがあり、家族が、仲間が住んでいる。だから「助けたい」につながるのではないかと考えた。地震災害の映像や被害の現状、いかに地震が高頻度で起きているのかが分かる資料等を示しながらも、子どもたちの心に響くものを探した。東日本大震災での東松島市の「佐藤山」等、印象的な資料やエピソードが数多くある中から、避難所となっている体育館で大震災10日後に挙行された卒業式での、涙をこらえながら答辞を述べた卒業生代表の映像は子どもたちの心にもかなり響いたようだった。涙を浮かべる子も多数。友を亡くした卒業生代表のつらさや悔しさが予想以上に伝わっていた。

地震災害については、被害や対策の事象に目が行きがちであるが、そこにかかわる「人」に注目して、「人」の生活や命に対する思いが大切であると確信した。

気仙沼市立階上中学校卒業式 卒業生答辞（卒業生代表 梶原裕太さん）抜粋

ちょうど10日前の3月12日。私たちは、通い慣れたこの学舎を、57名揃って巣立つはずでした。前日の11日、一足早く渡された思い出のたくさん詰まったアルバムを開き、十数時間後の卒業式に思いを馳せた友もいたことでしょうか。「東日本大震災」と名付けられる天変地異が起こるとも知らずに…。

階上中学校といえば「防災教育」といわれ、十分な訓練もしていた私たちでした。しかし、自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というには、むごすぎるものでした。つらくて、悔しくてたまりません。時計の針は14時46分を指したままです。でも時は確実に流れています。生かされた者として、顔を上げ、常に思いやりの心を持ち、強く、正しく、たくましく生きていかなければなりません。命の重さを知るには大き過ぎる代償でした。しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていくことが、これからの私たちの使命です。

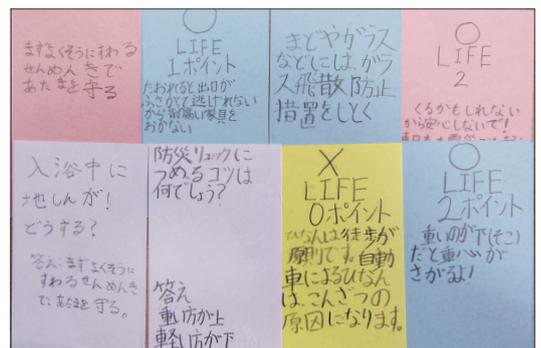
(2) 「命が助かる」ヒントを分かりやすく伝えたい

地震災害から「命が助かる」ためのヒントとして、地震の前しておくこと、地震が起きたときにすべきこと、地震後の生活や復旧に向けて大事なことの3つの場面に分けて「たすカルタ」を作成していく。子どもたち一人一人が調べたことを基にカルタとしての形式に合わせて作成。それぞれのカルタ案をグループ内で精査し合い、カルタの内容によって1～3点でLIFEポイントの軽重を付けたり、高得点になるプレミアムカードを決めたりすることにしていたのだが、子どもたちの中でどう検討していくのか。

まずはお互いの案を出し合うところから始めたグループが多い。カルタといっても、ただ単に「あ」「か」を探すのではなく、クイズ形式になっており、取り札は「答え」でありダミーの取り札もある。カルタを試しにやりながら、「問題の意味がよく分からないな。いつやることなの？場所はどこ？」「その問題にこの答えって本当に正しいの？」「その問題の答えは他にもあると思う。こっちの取り札も答えになっちゃうよ？」「Aくんと同じ問題なのに答えは違うんだな。どの資料で調べたの？」等、よりよいカルタとなるように意見を伝え合っている。

ポイントの軽重をどう決めるのか。ポイントを検討することによって、より内容に注目できるのではないかと考えたが、グループによってその決め方が様々。みんなが答えられなかったものを高ポイントにするグループ、命にかかわる度合いが高いものを高ポイントにするグループ、みんなが調べていた（重要だと思っていた）内容を高ポイントにするグループ。それらの決め方をグループ間で取り入れながら複数の決め方で話し合っていた。

ポイント付けも大詰め、一つ課題を投げ掛けた。「インタビューしたときに出てきた家族の不安や困難への答えになっている？」子どもたちはハッとした様子でノートや資料を見直ししながら、「まだ足りないから調べたいです」という声が多数上がるぐらい、「命が助かる」ことへの思いをもって取り組んでいる姿があった。カルタづくりを楽しみながらも真剣な取組となっていたのではないだろうか。



3年社会科 地域の歴史を自分事として捉え、未来を構想する学び

指導者：山崎 泰明

研究の実践

1 単元「調べよう 秋田市のうつりかわり タイムトラベルすごろくをつくろう」

2 授業の実際

(1) 地域の移り変わりを追い、過去を捉え直す学びのプロセス

学習を進める中で、子どもたちは秋田市の過去と現在を照らし合わせながら、まちの移り変わりを自分事として捉え始めていた。家庭へのインタビュー活動や昔の写真の比較は、子どもたちの関心を強く引きつけ、歴史的な見方を初めて獲得する上で大きな役割を果たしたと考える。自分の生活とつながる情報を手がかりに、時代の移り変わりを主体的に追究する姿が見られたことは、本単元の大きな成果である。家庭へのインタビューカードは3学級で69枚にのぼり、探究活動の一端として意義ある成果となった。中には祖父の小学校時代の集合写真を持参した子どももいた。その写真を囲んだ子どもたちからは、「人数多いよね」「教室の中、違う所いっぱいある」といった素朴なつぶやきが自然に生まれた。写真という実物を手がかりに、子どもたちが過去を想像し、現在との違いに気付いていくプロセスがよく表れている。たった一枚の写真が、児童にとって「見えない過去を見えるようにする」契機となり、時間の流れを意識した学びへとつながったといえる。また、秋田駅前の移り変わりを示す写真資料に触れた際、子どもたちの反応から、まちが変わり続けているという気付きが芽生えていることが見て取れた。これは、子どもたちが自分たちの地域社会を固定的なものではなく、変化し続けるものとして見つめ直し始めたことを示す重要な兆しである。日々の生活の場である秋田市が、この瞬間も変化しているという気付きは、子どもたちがこれから起こる社会的な出来事を自分事として捉えるための基盤となる。以上のことから、家庭での聞き取りや歴史資料の活用は、子どもたちが過去と現在をつなぎ、未来を主体的に構想するための基盤となる力を培う上で、大きな意義をもつ実践であったといえる。子どもたちの生活経験と地域の歴史的变化を往還させる学びを支える中で、指導者としての視点も広がり、子どもの思考の揺れや深まりをより丁寧に捉えようとする姿勢が強まった。

(2) 地域の未来を考える児童の姿に示される学習の価値

秋田市の移り変わりをすごろくにまとめる活動は、子どもたちが自ら考え、学習に積極的に参加する姿を生み出す有効な手立てとなった。学習への参加に消極的な傾向があるA児から「今日、社会ある、やったー」という発言が聞かれ、活動への期待や関心の高まりを感じた。ゲーム的要素と自己調整的に進められる構造が、学習意欲を支えたと考えられる。明治から令和までの秋田市の出来事をカードにまとめる活動



では、「明治7年に附属小学校ができた」「平成17年に人口が330,621人になった」など、より自分たちに関わりの深い出来事をカードに書き込み、意欲的に作成を進める姿が印象的だった。一方で、未来の秋田市を考える学習は、子どもたちにとって容易ではなかった。根拠のない予想にとどまらず、現実的な未来像を描くためには確かな情報が必要であると判断し、市役所職員による講話の機会を設定した。普段は落ち着いた話を聞くことが難しいB児・C児も、10年後の秋田市の姿について真剣に耳を傾けていた。普段はノート記述に時間を要するD児が、講話中に多くのメモを取りながら集中して聞いていた姿からも、市役所職員から直接「未来の秋田市」について語ってもらうことが、子どもたちにとって大きな刺激となったことが分かる。行政として地域の将来像を描き、実際に計画を進めている立場からの話は、子どもたちが地域をより現実的に捉える契機となったと考えられる。講話後にD児が漏らした「疲れた」という言葉は、学び取ろうとする強い姿勢の表れであった。講話を踏まえ、子どもたちが悲観的な未来像に引きずられないよう、「10年後の秋田市がどんなまちになってほしいか」を考える活動へとつなげた。単元の初め、新しいお店がたくさんできると予想したE児は「空き家が増える」というキーワードに関心を示し、空き家の増加が秋田市にとって望ましくないと考えた。その後、空き家問題を解決するにはどうしたらよいか考えたE児はゲストティーチャーに質問し、「プロモーション」という概念が課題解決の手がかりになることを理解した。E児のカードには「プロモーション（秋田市のよいところを共有）をして、人口を増やしている」と記されており、講話を踏まえて自分なりの未来像を構築したことがうかがえた。秋田市の未来を思い描く活動に取り組む中で、子どもたちが現実の課題と向き合い、よりよい未来を創ろうと知恵を絞る姿に触れたことは、指導者である私自身の学びにもつながった。子どもたちが秋田市の過去・現在・未来をつなげて考えようとする姿を目の当たりにし、社会科の学習が「社会の一員としての役割意識」を育む重要な場であることを改めて実感した。今回の実践を通して、私は子どもたちの思考の芽生えをより丁寧に見取り、その可能性を引き出す授業づくりの必要性を強く意識するようになった。